



学習から学修へ — 大学書写教育の場合 —

文学部 豊口 和士



専門は、書道ならびに書写書道教育（書写教育とは小・中学校国語での文字教育、書道教育とは高等学校での芸術教科）。授業外では、作品の制作・発表、小学校・中学校学校教科書の執筆、小中高教育現場での実技指導・講演などを行っている。現在は、「手で文字を書く」ことについて、文字環境の変化を踏まえた多角的な検証に継続的に取り組んでいる。
（とよぐちかずお）

書道実技、書文化に関する科目の他、高等学校芸術科書道教員免許状取得に必要な技能、教科教育法、教科に関連する領域、小学校および中学校国語教員免許状取得に必要な技能、指導法についての科目を担当しています。ここでは、小・中学校における書写指導についての学修を中心に、大学書写教育についてご紹介します。

1. 大学における書写教育

「書写」とは、毛筆・硬筆を使って文字を学習する、小・中学校国語科の一領域です。世間一般では「習字」と呼ばれることもありますが、今日、習字という用語は学校教育の場では用いられません。まずはその名称の誤りを払拭することからこの科目での学修はスタートします。名称は、そのまま学習指導の目標・内容・方法に関わります。教育現場では今なお、お手本（いかにも「お習字」的な用語）を真似て文字をいかに上手に書くかという指導が実践されているケースも少なくありません。その原因として、大学における書写教育の不備が挙げられます。免許法での表記の解釈にも関わる問題ではありますが、おおよその大学で、特に小学校教員免許状取得にあたっての書写指導に関する学修機会は、教育現場での実践の必要性を考えれば不十分といわざるを得ません。また、国語科書写と芸術科書道の区別なく、単に毛筆技能の習熟

を学修目標に授業を展開している大学・大学教員が少なくないのも現状です。

社会に向けて人材を輩出するべき大学で、特に教員養成を目指した授業においては、現代の社会ならびに教育現場の実態を常に念頭に置いた学びが実践されなければならず、書写に限ったことではなく、教育現場における各教科・領域での学習の意義と価値を十分に理解した人材を育成・輩出することがそこの責務・質保証といえるでしょう。

2. 学習から学修へのシフト

書道では、文字を「美しく」書くことが目指され、そのために必要な様々な技能や多様な表現方法を学ぶとともに、文字文化およびその歴史を学び、美に対する感性や態度の伸長などが図られます。一方の書写では、国語科の一領域として文字を「正しく」書くことが目指されます。それは言語によるコミュニケーションを支える重要な基盤でもあります。

今日、IT機器のめざましい発展に伴い文字環境が大きく変化し続けていく一方で、手書きされた文字の価値が再認識される傾向も見られます。こうした文字環境の実態、手で文字を書くことの意味、そして文字を学習・学修することの価値を、指導者の視点から改めて見直すこともこの授業で学修すべきことです。

文字を上手にきれいに書きたいと願う気持ちは、IT社会が進展し続ける今日であっても、少なくとも日本社会においては老若男女問わず誰もが抱く心情でありましょう。それは単に整った文字を書く技能を獲得したいというだけでなく、「いかに文字を書くか」ということが社会生活を営む上で必要と考えられているからであり、それは日本の文字文化とその歴史に深く根ざした意識といえるでしょう。こうした点について、「学習」する側から、指導することを自覚し「学修」する側へと視点をシフトしたとき、学生に大きな変化が生じます。学修の対象となる文字は学生にとって極めて身近な存在であり、また書写は誰もが必ず経験してきた学習であることもあり、学生に対してこのシフトを促す契機は比較的設定しやすく、学生自身にとってもそのシフトは体感しやすいものなのです。

「学生の主体的な学びの確立」を目指した大学教育改革が進められている昨今、まずは大学における学びを学生自らで「学習」から「学修」へとシフトする契機を、授業を通じて提供することが必要でありましょう。

3. 書写指導のメカニズム

書写は、PDCAサイクルに基づく授業が極めて実践しやすく、そのモデルケースというべき展開が可能です。学習対象である文字が極めて日常的な存在であること、学習内容が細分化されているため一単位時間程度で学習が完結できること、反復・積み重ねを繰り返しながら段階的に学習課程が構築されていること等がその要因といえます。それ故、学習の成果を単位時間の中で学習者が学習者レベルで確実に実感でき、さらに学習成果をそのまま他教科での学習といったごく身近な日常生活の場面や社会生活全般の中で活用可能であることにより、身近な文字環境を背景にし

た学習成果の実感・理解が図れるわけです。また、単位時間の中での学習過程において「モニタリング」と「コントロール」の小規模なサイクルを繰り返しながら単位時間内で成果物の完成へと辿り着き、そこでの成果ならびに未解決の課題が次の学習へと引き継がれることが、典型的な書写の学習スタイルとして定着している点も特記すべき点です。

こうした学びのメカニズムは、大学生の学びにおいてもまた同様であり、学習者の立場に立って学習成果を実感するとともに、それを指導者の視点で見直すという体験自体が大学書写教育での学修となりうるわけです。



学習者の視点を学修

4. 大学での学修としての書写

書写の学習で扱う学習教材は物理的にも限定されます。それ故、日常生活・社会生活の中で様々な文字をいかに書くかについての方略を場面に応じて適切に選択し使い分けるための知識（書字上の秩序・ルール）が、書写の学習を通じて習得すべきメタ認知的知識となります。ですから、書写の学習を通じて獲得された方略が学習者にとって実生活で活用されるメタ認知的知識となるべく、その指導に必要な能力を大学書写教育の中で修得する必要があります。指導に必要な技能に習熟し指導法を学ぶにとどまらず、課題解決・目標達成のために駆使される手段・方法を学習方略として学習者自身が理解し、その有効性を実感し、適用条件の知識を連合して獲得するとともに、それに基づいてその方略を実生活の中で自律的に使いこなせる能力が習得できる学習課程を実践する上で、自身の指導をメタメタ認知できる能力を学生自らが主体的に修得すること、それが大学書写教育での学びといえるでしょう。